

Ⅱ－５

ソーシャルワーク分野における テキストマイニング用語辞書の作成について

有村大士（日本子ども家庭総合研究所研究員）

ソーシャルワーク分野におけるテキストマイニングの位置づけ

例えば、これまで福祉分野の質的研究では、特に実践モデルなどを構築する場合、実践者にインタビューを行い、その結果を基に、言葉の質的な部分まで理解した上で、モデルの構築を行うという方法がとられてきた。しかし、実践者の質的な部分は、特にインタビューアに実践経験がない場合など、質的な理解を得るための質問が十分に飽和しているのかどうかの判断は難しい。実践者は、それまでの実践者自身の生きてきた時代や人生までも含めた経験を有しており、それらを質問によってすべて把握することは不可能といえる。

テキストマイニングは、コンピューターをツールとして利用し、膨大な自由記述や逐語記録から、傾向や、価値のあるデータを分析・発見するための方法である。使われている用語や、将来の話になるかもしれないが文脈を把握し、それを基に統計的な手法を利用し、客観的にまとめていく技法である。この手法を使用すると、質的な部分の影響を受けることなく、言葉の位置づけや、会話の全体像を単語の出現頻度や、出現場所などをヒントに全体像を把握することが可能となる。社会福祉分野ではまだそれほど利用した文献は多くないが、特にビジネスの分野なので、蓄積が顕著である。

ソーシャルワーク分野におけるテキストマイニング利用に関する問題点の解決

テキストマイニングを行う上で、まず問題となるのが、解析までに多くの労力や時間がかかることである。例えばインタビュー結果を分析しようとした場合、研究方法の議論を除いて、入力が大きくなるとなるだろう。さらに、扱う文章によって、使用する言葉、特に同義語や類義語がある場合の対処、あるいは表現のゆれといった部分を解析する場合である。これらを利用するためには、テキストマイニングを行うための辞書が必要となる。

日本社会福祉養成校協会が先般まとめた、「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・復旧に関する研究」報告書の中で、高橋重宏は、社会福祉学研究自体が未だ発展途上であるということを描き、さらに「訳語や造語などが百家争鳴で、

それが研究者・教員間の共通認識となっていないまま用いられている」現状を指摘している。

従って、テキストマイニングを効果的に行うためには、その同義語、類義語、表記のゆれなどを乗り越えるため、単語の意味まで搭載したテキストマイニング用語辞書を社会福祉分野向けに作る必要があるであろう。今後、本業界でテキストマイニングを使用するためには、本研究を通じて製作した辞書を基に、それ以上の個別分野の用語を加え、より早く、依り効果的なテキストマイニングが行える環境を整えられる。

本研究との関連

本研究は、ソーシャルワーク事例をインターネットを通じて、実践者、理論家、学生などの間で、経験を共有する試みだが、将来膨大に事例が蓄積された場合、それらの中から求める事例を適切に見つけ出す技術を開発する必要がある。例えば、検索サイト Google (<http://www.google.co.jp>) では、入力、検索した検索対象語から、検索結果の位置づけを行い、得点順に掲載する。しかし、今回のように分野が社会福祉分野に限られている場合、例えば、先にカテゴリーを分けた上で、その後検索語として入力されたものを得点化していくような検索方法を利用することが可能である。しかし、同義語の多さや、定義のあいまいさにより、左右されずに、精度の高い検索が行えるよう辞書構築も含めたテキストマイニング技術を採用した。

用語辞書の作成に向けて

前述のように、社会福祉分野の辞書を制作する意味はあるが、①実際どのように表記されているのかを把握することや、②言葉の定義を決めていく方法などが議論される必要がある。今回は、②の部分に限って、用語の定義を決定するための試行を行うこととする。ただし、ここで述べる用語の「定義」とは、あくまでテキストマイニングを行う上で、類義語や関連後、概念が似たものなどをまとめるための作業であり、われわれが一般にイメージする辞書とは異なり、言葉の結びつきなどかを利用して解析を行う。

用語辞書の構造



図1 対応構造

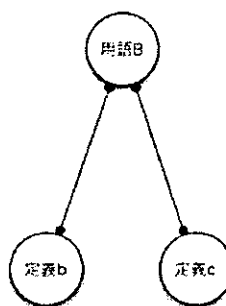


図2 樹構造

前日の用語の定義について、次の図を参照しながら説明をしたい。左側の図1では、用語に対して、一つの意味を定義していく構造である。逆に、右側の図2では、一つの利用語に2つの意味を定義したイメージだが、複数の意味を定義していくモデルとしてみていただきたい。図1では、一つの定義しか示せないために、一対一の関係性となっている。つまり、用語の定義は厳密であり、変化することや多様な使われ方をしている場合に対応できない。図2は多様な用語の使われ方に対応できることから、それぞれ複数の意味を持つことが潜在的に可能となる。辞書構造としては、図1の方が、辞書作業過程においても、解析過程においても容易である。しかし、ソーシャルワークでは、時代の変化等によるパラダイムシフトが起こった場合など、前時代の意味とは異なった意味づけがなされている場合がある。特に日本ではこの傾向は顕著であり、ソーシャルワークの実践現場と教育分野、あるいは教育分野でも時代の変化に対する認識は千差万別でありため、ソーシャルワークの発展によって差が生まれ、一つの言葉が複数の分野にわたって関連用語となる実態が予測できる。

これらの踏まえ、図3に用語、定義、及び概念の関係を示した。図1、2と違い、図3では、用語、定義、概念が網の目上に構築されている。例えば、「ソーシャルワーク」という用語を通じて、図3についてももう少し詳しく考えてみたい。「ソーシャルワーク」は、外来語である。従って、カタカナによって表記される。カタカナ表記の場合、表記のゆれがあり、「ソーシャルワーク」「ソーシャル・ワーク」「ソーシャル＝ワーク」は別の表記となろう。さらに、社会福祉士要請科目の中には、「社会福祉援助技術」という言葉があり、これも同義語と思われる。従ってこれらの定義を、すべて「Social Work」とする。「Social Work」は、上位の概念を示す言葉であり、概念は「Social Work」とまとめられていく。更に違う用語を捉える場合には、複数の概念を持つ用語も想定できよう。

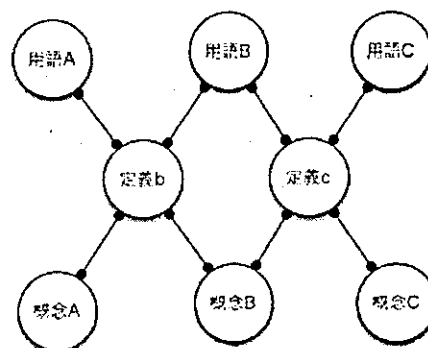


図3 用語-定義-概念の関係

これらを踏まえると、用語の定義は一つに絞るべきではなく、上位の概念となる用語と、あるいは定義を複数指定していくような辞書モデルを想定するべきであろう。

用語辞書の作成試行

以上を踏まえ、本年度は、用語辞書の作成のための試行を行い、来年度、テキストマイニング辞書を本格的に作成するため、想定する作業を実際に行ってみて分析し、よりよい作成法の構築に向けて、考察を得ることとした。現在のところ、テキストマイニング用語辞書の作成については以下の工程が必要であると想定している。

1. 「概念」にあたる用語、そして「定義」となる用語を選別する。
2. 実際に1.で選別した「概念」「定義」となる用語に対して、実際に関連があるかどうかを調べる。この課程では、複数人によって判断していくことを想定しているが、その作業を行う前に、リファレンスとなる情報を被験者に与え、共通の情報を持った上で判断を行う。
3. 最終的に、判断がずれた部分に対し、よりリエキスパートと思われる院生や教員に判断してもらい、最終的な判断を行う。

今回は、以上の1～2について、4人1組のグループを2組作り、実際の作業を行った。ただし、「概念」「定義」となる用語については、研究班内でコンセンサスを統一していないため、先述の「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究」より重要用語となり、その定義作りを行った150語から、大学院生に20語を選定してもらい、各組10語ずつ作業を行った。

リファレンス情報としては、先述の「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究」と北米で一般的と思われる「The Social Work Dictionary」を使用することとする。

1グループの4人は、同じゼミに所属する社会福祉分野の学部生で、かつ同じ授業（ゼミ）に参加している。また、編入生はおらず、今回の調査の目的から考えると、お互いが比較的似た背景を持つ。1グループでは、重要擁護として、「アウトリーチ」「アセスメント」「エコロジカルアプローチ」「エンパワーメント」「価値」「共感」「コンピテンス」「ジェネリックソーシャルワーク」「自己覚知」「ストレングス視点」の10語について、先述の「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究」の150語が手儀になるかどうかについて、なりそうなものに「1」、そうでないものに「0」を記入した。

すると、各用語に1をつけた数は以下ようになった。

| | A | B | C | D |
|----------------|----|----|----|----|
| アウトリーチ | 35 | 17 | 17 | 29 |
| アセスメント | 26 | 12 | 45 | 41 |
| エコロジカルアプローチ | 30 | 19 | 25 | 59 |
| エンパワーメント | 18 | 19 | 27 | 8 |
| 価値 | 21 | 32 | 16 | 25 |
| 共感 | 15 | 6 | 20 | 15 |
| コンピテンス | 26 | 4 | 17 | 4 |
| ジェネリックソーシャルワーク | 33 | 24 | 25 | 52 |
| 自己覚知 | 13 | 5 | 12 | 7 |
| ストレングス視点 | 5 | 25 | 24 | 9 |

表1 被験者と選択した数（グループ1）

表1では、それぞれが「1」と記入した項目の数の差は大きいことが分かるであろう。では次に、図1、表2は、それぞれの用語について、平均の分布を示したものである。平均はパーセント表記に直した。1チームには4人が所属していることから、100%、75%、50%、25%、0%に5つのこれによると、「ジェネリックソーシャルワーク」「エコロジカルアプローチ」という二つの用語で選択率「0%」が少なくなっており、他の用語との関連が大きいことを示している。つまり、より「概念」に近い用語であると判断できよう。

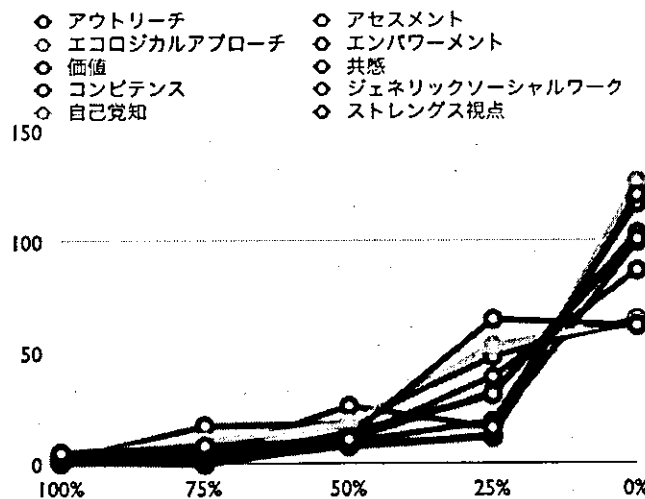


図1 選択率（グループ1）

次に、表2、図2は、選択が一致した割合に応じた数を示した。選択肢が「0」と「1」の2つしかないため、高い方の割合から、100%、75%、50%についてまとめてみた。すると、全体で150語存在する中で、意見が割れたものは少なく、どちらかに偏ることが分かった。

| | 100% | 75% | 50% |
|----------------|------|-----|-----|
| アウトリーチ | 92 | 47 | 11 |
| アセスメント | 67 | 71 | 12 |
| エコロジカルアプローチ | 69 | 63 | 18 |
| エンパワーメント | 102 | 34 | 14 |
| 価値 | 104 | 20 | 26 |
| 共感 | 124 | 18 | 8 |
| コンピテンス | 120 | 20 | 10 |
| ジェネリックソーシャルワーク | 67 | 65 | 18 |
| 自己覚知 | 128 | 13 | 9 |
| ストレングス視点 | 106 | 33 | 11 |

表2 一致した割合と数（グループ1）

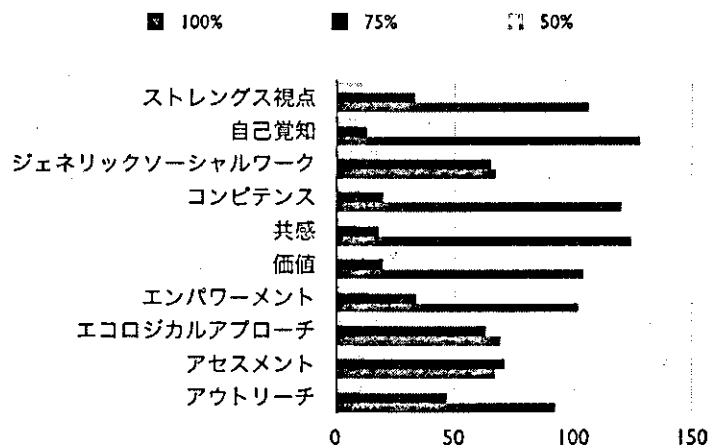


図2 一致した割合と数（グループ1）

さらに、表3、図3は、全体を100%とし、その割合で示したものである。この中では、100%一致している用語は、概ね高い割合を示し、70%と合わせると、8割を超えていることが分かる。つまり一致率が高いことが分かる。これはリファレンス情報が正確であることもあるが、その他に母集団の均一性が挙げられるため、後ほど属性が千差万別であるグループ2との比較を行い検証する。

| | 100% | 75% | 50% |
|----------------|-------|-------|-------|
| アウトリーチ | 61.3% | 31.3% | 7.3% |
| アセスメント | 44.7% | 47.3% | 8.0% |
| エコロジカルアプローチ | 46.0% | 42.0% | 12.0% |
| エンパワーメント | 68.0% | 22.7% | 9.3% |
| 価値 | 69.3% | 13.3% | 17.3% |
| 共感 | 82.7% | 12.0% | 5.3% |
| コンピテンス | 80.0% | 13.3% | 6.7% |
| ジェネリックソーシャルワーク | 44.7% | 43.3% | 12.0% |
| 自己覚知 | 85.3% | 8.7% | 6.0% |
| ストレングス視点 | 70.7% | 22.0% | 7.3% |

表3 一致した割合とその占める割合（グループ1）

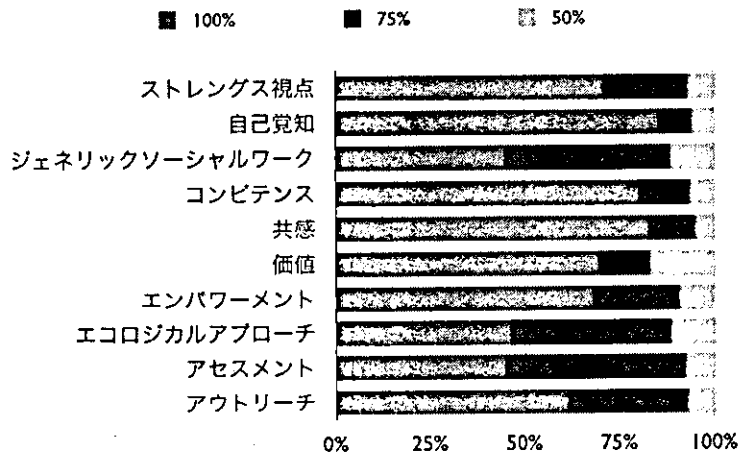


図3 一致した割合とその占める割合（グループ1）

同様に、グループ2についても1グループと同様に調査を行った。グループ2は、全員社会福祉の学部生であるものの、ゼミが違う者、及び編入した者が混じているものの、経歴がばらけている。さらに、選択の幅についても大きな差があり、下表でもEとHの選択した数の差が大きくなっている。用語として、「ソーシャルアクション」「トリートメント」「プランニング」「インターベンション」「エバリュエーション」「アドボカシー」「ウェルビーイング」「家族療法」「守秘義務」「倫理」について調査を行った。

| | E | F | G | H |
|------------|---|----|----|-----|
| ソーシャルアクション | 3 | 2 | 13 | 113 |
| トリートメント | 1 | 4 | 12 | 107 |
| プランニング | 3 | 9 | 6 | 104 |
| インターベンション | 2 | 16 | 31 | 101 |
| エバリュエーション | 3 | 3 | 3 | 94 |
| アドボカシー | 3 | 7 | 10 | 89 |
| ウェルビーイング | 2 | 5 | 7 | 133 |
| 家族療法 | 2 | 19 | 5 | 117 |
| 守秘義務 | 2 | 3 | 3 | 96 |
| 倫理 | 1 | 17 | 5 | 83 |

表4 被験者と選択した数 (グループ2)

そこで、図4は、グループ1と同様に、それぞれの用語について、平均の分布を示したものである。すると、被験者Hの影響か、0%が少なくなっており、その分25%が多くなっている。

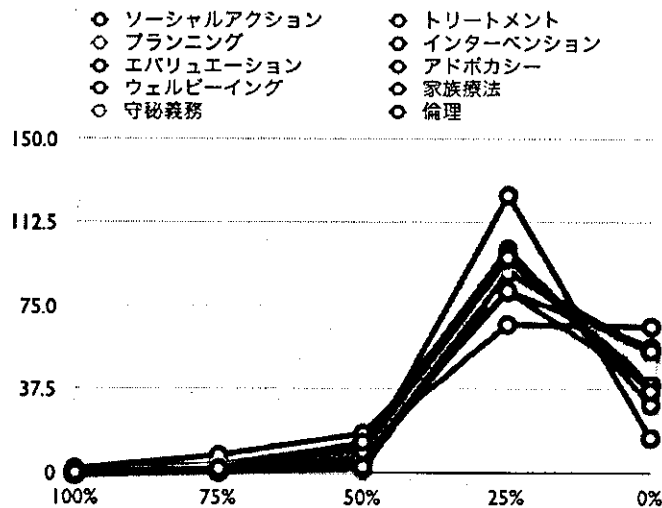


図4 選択率 (グループ2)

表5の、2グループについての一致した数と割合を参照してみると、グループ1と比較し、100%が著しく少ない。その代わりに、一致率75%が著しく増えている。

| | 100% | 75% | 50% |
|------------|------|-----|-----|
| ソーシャルアクション | 37 | 99 | 14 |
| トリートメント | 40 | 100 | 10 |
| プランニング | 43 | 98 | 9 |
| インターベンション | 42 | 90 | 18 |
| エバリュエーション | 56 | 91 | 3 |
| アドボカシー | 59 | 83 | 8 |
| ウェルビーイング | 17 | 127 | 6 |
| 家族療法 | 32 | 105 | 13 |
| 守秘義務 | 51 | 98 | 1 |
| 倫理 | 67 | 70 | 13 |

表6 一致した割合とその占める割合（グループ2）

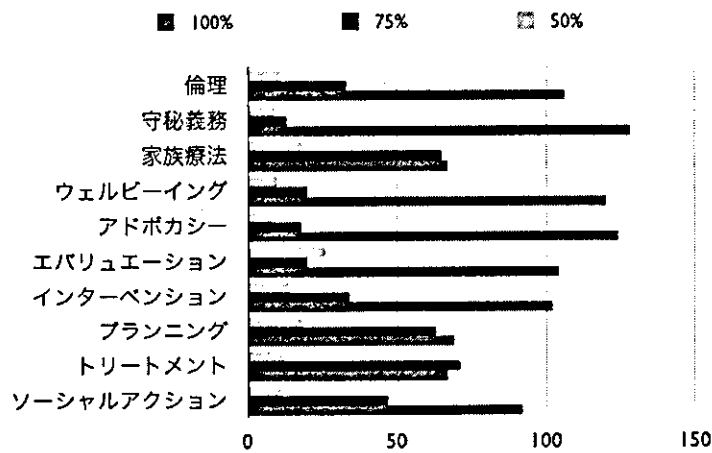


図5 一致した割合と数（グループ2）

最後に、図5、表5において、一致した割合を示した。すると、100%、及び75%を併せてみると、グループ1と同様8割を越えていた。

| | 100% | 75% | 50% |
|------------|-------|-------|-------|
| ソーシャルアクション | 24.7% | 66.0% | 9.3% |
| トリートメント | 26.7% | 66.7% | 6.7% |
| プランニング | 28.7% | 65.3% | 6.0% |
| インターベンション | 28.0% | 60.0% | 12.0% |
| エバリュエーション | 37.3% | 60.7% | 2.0% |
| アドボカシー | 39.3% | 55.3% | 5.3% |
| ウェルビーイング | 11.3% | 84.7% | 4.0% |
| 家族療法 | 21.3% | 70.0% | 8.7% |
| 守秘義務 | 34.0% | 65.3% | 0.7% |
| 倫理 | 44.7% | 46.7% | 8.7% |

表5 一致した割合と数（グループ2）

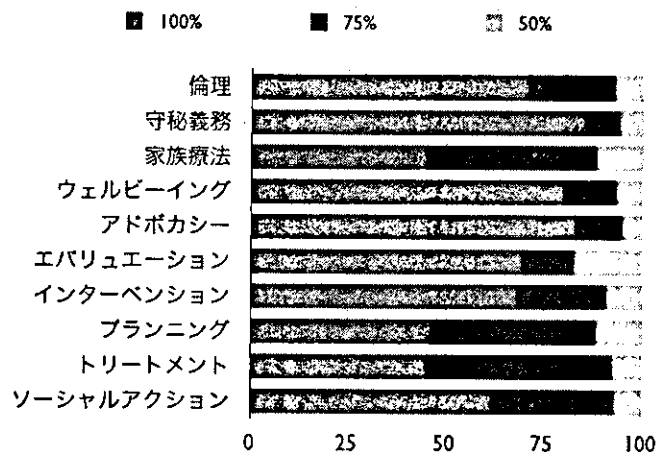


図6 一致した割合とその占める割合（グループ2）

考 察

グループ1、グループ2を比較すると、表記のゆれと同様、それぞれの用語に対してイメージする定義のゆれの部分が小さくなったためか、同じようなバックグラウンドを持つグループの方が100%の一致率が高くなったと思われる。しかし、75%の一致率で考える際には、どちらも8割を越えた。グループ2には、異なったバックグラウンドを持つ学生がいるため、グループ1と比較して判断のブレが大きくなったが、社会福祉の用語の定義が厳密に示されていない分野であるがためのものであると考えるならば、多少のブレは覚悟する必要があり、75%の一致で判断してもいいのではないかと考える。従って、大半の用語は学部生レベルの被験者に協力してもらい、判断が行える。逆に判断が完全に分か

れる2割の用語については、ブレを少なくするために、より専門性の高い院生や教員などに判断してもらう必要がある。

参考文献

社団法人日本社会福祉士養成校協会(2005)「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究」

Robert L. Barker (1998) 「The Social Work Dictionary」 NASW Press

高橋 信行 (2002) 『量的研究法と質的研究法の対話と和解』「ソーシャルワーク研究 108」

相川書房

徳永健伸著、辻井潤一編 (1999) 「情報検索と言語処理」東京大学出版会

Ⅲ 研究成果の刊行に関する一覧

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧

学会誌

- 矢部正治「ケアマネジメント・アーカイブスの構築・活用に関する研究」
（『社会事業研究』第44号・日本社会事業大学社会事業研究所）2005年1月発行

学会発表

- 小嶋章吾，鈴木ゆかり，田中千枝子，手島陸久，柳田正明，矢部正治，山下英三郎
「ソーシャルワーク・アーカイブスの構築に関する研究」
（日本社会福祉学会第52回全国大会・研究発表）2004.10
- 手島陸久，矢部正治
「ケアマネジメント・アーカイブスの構築に関する研究—実践事例の収集とデジタル化の構想—」（日本ケアマネジメント学会第4回大会・研究発表）2004.7
- 矢部正治，後藤隆，鈴木ゆかり，竹内幸子，手島陸久，柳田正明，山下英三郎，有村大士
「ケアマネジメント・アーカイブスの構築・活用に関する研究」
（第43回日本社会事業大学社会福祉学会・研究発表）2004.6

著書

- 小嶋章吾「事例記録の書式(フォーマット)」、日本社会福祉実践理論学会監修『事例研究・教育法』川島書店、133-144、2004年
- 小嶋章吾「記録」岡本民夫監修『社会福祉援助技術(上)』川島書店、178-188、2004年

IV 研究成果の刊行物・別刷

ケアマネジメント・アーカイブスの構築・活用に関する研究

○矢部 この「ケアマネジメント・アーカイブスの構築」の研究は、手島陸久(学部教授)、後藤隆(学部助教授)、竹内幸子(学部助教授)、山下英三郎(研究所助教授)、鈴木ゆかり(通信教育科教員)、柳田正明(学部実習講師)の各先生と、大学院博士後期課程の有村大士さんにご参加いただき、共同研究として行いました。ここではケアマネジメントに限定しているわけですが、実際上のシステム構築の構想としては、ケアマネジメント実践をふくめてソーシャルワーク実践全体を対象としたアーカイブスを作ろうという構想です。

アーカイブスとは何かといいますと、最近では「NHKアーカイブス」が有名になっていますが、古文書館又は資料館の意味ですが、コンピューター上ではデータを圧縮して保管する場所との意で使用されています。ここでは実践事例の収集と蓄積の場としてのアーカイブス・オブ・ケアマネジメントあるいはソーシャルワークを考えていきたいと思っております。

1. なぜ実践事例の収集が必要なのか？

なぜ実践事例を収集する必要があるかの議論が大切です。実践事例から学べることは非常に多く、実践の中から、実践の持っている方法あるいは視点を直接的に学んでいくことができます。さらに、ここでは、実践事例を長期的に、時間的にも数としても収集、蓄積をしていくことによって、その分析から更に新たなものがわかっていくのではないかと想定して、事例の収集を考えていこうと、この研究チームで議論してきました。

ケアマネジメントあるいはソーシャルワークというものがあるのか、いまだに明確でなく、多義的であったり、使う人によって違っていたりします。何よりも問題なのは、社会的にみても、多くの人にとって、可視的でないことでしょう。

その定義の理論上の議論そのものよりも、何よ



りも問題は、ソーシャルワークやケアマネジメントができるということはどういうことなのか、実践者にとって何が必要かを明らかにする必要があるのではないのでしょうか。

この間、とくに福祉専門職への要求が非常に強くなってきています。一つには、社会的に深刻な相談援助を求める方々が増えていること、もう一方では、規制緩和が進んで、今まで「福祉」とされていた分野に、さまざまな人が参入してきたからです。ある意味では行政や社会福祉法人に限られていた仕事が、そうではなくて、誰でもやってもいい、営利企業でもいいとなったとすれば、その中身を担保するものは何なのかという場合に、どうしても専門職としての中身をはっきり規定していく必要があります。

そういう議論をしたときに、では、社会福祉士とは何か、社会福祉士には何ができるのかと言われたときに、明確な答えが出せない現状では、非常に寂しいのではないかと。そのような問題意識の中から、ある意味では、そういったケアマネジメント、ソーシャルワークの実践過程を、ある先生がよくお使いになる言葉で言えば、「分節化し、可視化する」、分けて見えるようにするという意味を込めてこういうことを構想してきたわけですね。何よりも、伝達可能なかたちで提示をしていくことによって新しい展開があるのではないかと考えています。

2. なぜ、デジタル化なのか？

今までも「実践事例集」が文章に出されているわけですが、デジタル化していく必要があるだろうという議論をしてきました。なぜデジタル化をする必要があるのかは言うまでもないことです。「実践事例集」をばんと渡されて、「これを読め」と言っても、読むのがかなり苦痛なものであって、自分の問題意識を触発できるような事例なのかどうなのかということ自体が、読んでみなければ分からない性格だと思います。そういう意味では、今までも「実践事例集」がたくさん作られてきていますが、十分活用されていないのではないかと考えています。

それに対して、自分の具体的な問題意識、例えばアルコール依存症とかALSの患者さん、あるいは特殊な疾病の方という対象で検索できたり、あるいは、援助困難事例と言われているときにいくつかのキーワードで検索できるようにして、そこでの実践のヒントができるようなものをぜひ作っていききたいというのがデータベース化していくことの意味であろうと思います。

さらにもう一つは、皆様ご存じのように、今までは量的な調査研究が非常に多かったわけですが、それを超えるものとして、昨今のグランディドセオリーなどさまざまな質的研究方法、いわゆる事例的研究方法が発展してきています。その展開に併せて、テキストデータ、ナラティブな、物語的なデータを一定の手法で分析できる可能性が非常に高まってきています。そういうことを含めて、デジタル化していくことによって、テキスト分析ができてくるのではないかと。そういうことを含めて、こういうデジタルデータベースの必要性を展望したわけです。

ケアマネジメントなりソーシャルワークの技術、方法、活動の内容を分解しながら統合して理解することによって、いわば今まで職人芸としてやってこられたような今までのソーシャルワークの世界、ケアマネジメントの世界の達人が、どういふふうにならったのかということ、20年現場で頑張ったからという。そういう人たちだけではなく

て、もちろんそういう臨床経験も必要なわけですが、それを短期に効率的に習得するためには、やはりそのものが見えるようなかたちにしていくことによって伝達可能にする必要があるのではないかと考えました。

相談を要求する人がますます増えていく中では、良い相談者をなるべく大量に早く生み出すことを社会的な使命として、われわれ自身が良い相談者になっていかなければならないということを展望していきながら考えていきたいと思っています。

3. データベース活用の方向と収集事例の枠組み

こういうデータベースができたらしのように活用できるかを考えてみたときに、実践者・教育者・研究者がそれぞれの立場で活用できるのではないかと議論しました。

しかし、例えば、今までの研究の先行事例を見ますと、研究者が事例評価あるいは事例分析のために事例を現場の人に書いてもらうかたち行くと、記載の枠組みなり形式をかなり厳密に決めていて、「この通りに書いてくれ」というかたちになるのが一般的でした。ここでは、そういう研究的、教育的な活用も視野に入れながら、しかし、事例提供者である実践者が書き、それが実践の参考になることを第一義的に重視していきたいと考えました。

こういう事例のデータベースができれば、実践のさまざまな知恵や工夫を知ることができます。そこから、実践の視点、方法を学ぶことによって、自分の実践に参考にすることができますし、同じような事例から参照することができます。研究的に言っても、そういった実践の在り方をトータルに把握することによって課題が明らかになっていくのではないかと考えております。

特に、データベースは1年、2年という短期的な話ではなくて、5年、10年という蓄積があれば、実践の歴史的な変遷も将来的には検証可能になっていくのではないかと。そのことを通じて、実践を整理していくことができます。自らの実践を記録化していくということは、実践者にとっても、実

践を対象化することによって自らの実践上の課題を発見するというので、書くことの意味はあるのではないかと考えております。

そういう立場で、実践者にとって書きやすく、なおかつ利用しやすいデータベースを展望した場合に、いくつかの議論があると思います。一つは、ケアマネジメントの場合は特にそういう議論が多いわけですが、例えば症例集的なものを、要介護度がこれこれ、こういう家族構成の場合にはヘルパーを週に何回ぐらい使うのが適当であるとかという結論を、利用標準のようなかたちで出すことができるのではないかと議論があります。

それ自体はあり得る議論だと思います。ただ、ケアマネジメントを一定の状況下におけるサービスの組み合わせの技術として考えるのならば、そういう症例集的なものになっていく可能性があります。しかし、ケアマネジメントを自立支援のための視点に立った、当事者の自己実現をする支援するプロセスであると考えていくという立場から考えたときには、やはり「実践事例集」となるのではないかと。

「実践事例集」になるということの意味は、利用者とケアマネジャー、ソーシャルワーカーとクライアントという閉ざされた関係で行われている実践を記録化することによって見えるかたちにしていくというのが狙いです。特にクライアントとソーシャルワーカー、ケアマネジャーと利用者という関係性を極めて重視した記録が必要ではないかと思っております。

従って、特定の書式や枠組み、あるいは対象の限定などを設けずに収集していきこうということになりました。ここからは必然的に、ケアマネジメントだけではなく、ソーシャルワークにも発展していくということで、分野その他にも制限を一切設けないことを提案しております。

しかしながら、そうはいつでも、何を書いてもいいという意味ではなくて、わかるような記録を書いていただきたい。「なぜあなたはそういう判断を選択したのですか」というときに、判断の根拠

になることをだれにでもわかるように書いていただきたい。その辺がなかなかわからない記録がよくあります。なぜそうなのか、「いくつかの選択肢の中で考えたときにこうしました」ということとなるべくわかるような記録にさせていただきたいと要望しております。

「提供していただきたい事例のいくつかの例」を紹介します。

一つは、ケアマネジメント実践の事例です。これは極めて短い、その局面だけに限定された実践でもいいし、10年間に及ぶ実践をまとめていただいてもよいのですが、しかし、「一定の実践のかかわりのある記録」というのがあります。実践の場面では一定のプロセスを経るわけですが、そのすべてのプロセスを書かなければならないということではなくて、ある一つの局面で、かかわりの中でこういうことが行われたということでも結構です。あまり長文の、30ページの記録を書かなければならないということではなくて、分割して書いていただいてもいいし、部分的な記録でも結構です。

もう一つは、逐語記録のような会話の記録などもいいでしょうし、事例検討やスーパービジョンの記録なども収集する必要があるのではないのでしょうか。むしろスーパービジョンなどの記録の方が、ある意味ではソーシャルワーク上の議論がわかりやすい面があると思いますので、そういう記録なども貴重なのではないかと。

一方、「『事実』を中心とした記録」があります。実践者のかかわりは今の段階では書けないが、極めて困難な、複合した事例や、社会支援がとてこれでは足りないということが明らかになるような事例でも結構ですということで、ある問題状況を記録化したものでも結構です。そういうふうに種類を限定しないで枠組みを作りました。

4. 重要なプライバシー保護

こういう事例のデータベースを作るときに一番重要なのはやはりプライバシー保護です。一番重要なところは、利用者の了承を得るということで

すが、現実的にはなかなか難しいのです。これを絶対条件にしてしまうとかなり難しい点もあります。

そこで、固有名詞をすべて匿名化することにしました。事例提供者を匿名にしてしまうと、事例提供者が例えば東京都清瀬市の在宅介護支援センターのただだれと特定されると、情報が極めて限定的になるわけです。「Aさん」というだけで、沖縄から北海道まで、日本語の文化圏の中の話だろうということで、場所が想定できなくなるのです。農産部だとか都市部だということぐらいしかわからなくなってしまいます。地域名、都道府県名はもちろん、施設名、事例提供者の名前、すべてを匿名化することによってかなり避けられるのではないかとことです。それでも特殊な事例で大体分かってしまうものに関して言えば、改定や情報の抽象化を行うことを提案しています。

更に、まだデータベースにアクセスする場合は、アクセスを専門職、研究者、教育者に限定します。だれにでも見られるページにしておくことはウェブ上非常に危険なので、だれでも見られることにはしない方向で検討しております。同時に、学内サーバーと公開サーバーは分離して、万が一セキュリティ上破られても固有名詞の出ている部分にはアクセスできないようにしておくということを議論しています。

事例の提供・収集の手順は、対象者の了承を得て、事例提供者に研究所への事例提供をしていたら、それを一定の整理をして、倫理審査あるいは加工をして、連絡をして承諾を得て閲覧するデータベースに掲載するというかたちを取ろうと考えております。

最後に、皆さん、特に現場の実践者の方々には自らの実践の事例をぜひ記録化して公開していただきたい。一人一人の実践記録の蓄積が将来のソーシャルワーク実践の大きな財産になっていくのだということで、このデータベースを育てていっていただきたいと思います。

私もこれは日本社会事業大学社会事業研究所の事業として行っていくわけですが、そ

ういう一大学あるいは特定の教員のものということではなくて、日本中のすべての実践者、教育者、研究者の共有財産として広く育てていけるように、その場をわれわれが提供するつもりでやっていきたいと思います。皆さんに実践の提供を広く呼びかけていただきたいと思います。リーフレットも置いてありますので、ぜひご活用いただければと思います。

○山下 矢部先生、どうもありがとうございます。社会福祉領域における実践・研究に関するデータ蓄積と意義と重要性について説明をしていただいたわけですが、つい先日も新聞でいろんな領域の方たちが結集して「アーカイブス学会」を作ったと報じられていましたが、そういった流れとも呼応するような動きではないと思います。ぜひ事例の提供等申し出ていただければと思います。これに関して質問おありでしょうか。はい。

○神山 実習教育センターの神山です。2点質問したいのですが、まずソーシャルワークとケアマネジメントの関係について定義が難しいという最初のご説明はあったんですが、この研究ではどのようにその辺を整理なさっているのかということをお一つ教えてください。

もう1点目は、ケアマネジメントのモデルに関する質問なのですが、アメリカやイギリスの先行研究の状況を見ますと、ケアマネジメントにはマネジドケアに近いタイプのものからソーシャルワークのアドボカシーとかエンパワーメントの手法を取り入れた、ほとんどソーシャルワークと言えるようなタイプのものまでありますが、この研究の中での考察はどのようになされたのかというところを教えてください。

○矢部 この研究グループの中では基本的な見解そのものはケアマネジメントというのはソーシャルワークの一つの手法であるという認識を持っている人が多い。そういうのは事実としてあると思います。ただ、それについてはあまりそういう定義の議論をしたり、あるいはモデル類型化をしてその中を分類していくということではなくて、広

く実践の収集をしていこうと。ただ、そうはいつでもソーシャルワーク的ではないケアマネジメント事例というのは当然あり得るわけであって、ご本人、事例提供者が自らケアマネジメント実践として展開されているものをこれはケアマネジメントじゃないと言ったりすることはできないと思いますので、ソーシャルワーク的な要素を含まないケアマネジメント実践というのももちろんあり得るわけです。従って、このデータベース上はケアマネジメント、ソーシャルワーク・ケアマネジメント・アーカイブスという名前にしてありますけれども、検索その他の機能の中ではソーシャルワークの領域とケアマネジメントの領域でそれぞれ別個に検索ができるようにしてあって、同時にデータ上はその多くが重なるというものとして整理をしています。以上でございます。

○神山 引き続き。ケアマネジメントとソーシャルワークの関係についてはアメリカやイギリスの状況を見ますと、かなり葛藤があって、ケアマネジメントを優先にしまうとソーシャルワークが消えていくというような傾向が一部見ら

れるということを知っています。ですので、いろんなケアマネジメントというのは一つのかたちというものがなくて、組織だとか機関だとか地域とか実践者によって多様なかたちがあるというのが今の状況だと理解していますので、ソーシャルワークというものがその中でどのように使われているのか、活用できるのかというようなことがわかるようなかたちでの事例の集積をぜひお願いしたいと思っています。

○矢部 当然に、ケアマネジメントやソーシャルワークが展開されている場や枠組み、システムが実践事例の上では重要です。今のご指摘を助言としてお聞きして、参考にしながら構築していきたいと思います。いろいろ問い合わせ等、疑問な点もおありかと思いますが、データ構築するために皆様の協力も必要ですので、コメント等社会事業研究所のオフィスまで積極的に連絡いただければありがたいと思っております。

○山下 矢部先生どうもありがとうございました。

○矢部 どうもありがとうございました。

<資料1> 収集事例モデル